園長便り　2022年1１月＋１２月

まじめな食育のお話を書くはずが・・・

食育で最初に思いつくのは、ドイツのドキュメンタリー作品「いのちの食べかた」

（Unser täglich Brot）、妻夫木聡さんが先生役をされた「ブタがいた教室」そして土井善晴さんが提唱する「一汁一菜でよいという提案」です。文部科学省が募集したSGH（スーパー・グローバル・スクール）に前任校が指定され、5年にわたって生徒たちと取り組んだ日々を思い起こします。一期生は大学卒業の年、多方面で活躍しています。東京で環境先進国といわれる大使館を訪ね、EU、JETRO、UNESCO、JICAや外務省などに出向いて話を聞き、真庭市でBIO発電や森林事業を学び、環境先進国と言われるドイツで多様なフィールドワークを経験してきました。環境とSDGsを中心に“think global, act local”、里山の復活、海洋汚染など濃密な学びをさせていただきました。

いのちの食べかた（日本語公式サイト）<http://www.espace-sarou.co.jp/inochi/>

[映画「ブタがいた教室」のぶーログ - ブタがいた教室製作委員会](https://web.archive.org/web/20120313024756/http:/buta.channel.yahoo.co.jp/)

『一汁一菜でよいという提案』（グラフィック社、2016年10月）のち新潮文庫

　ここでは、土井善晴さんのことばをご紹介したいと思います。「この本は、お料理を作るのがたいへんと感じている人に読んでほしいのです。」で始まる著書は、一汁一菜が和食献立のすすめではなく、「システム」、「思想」、「美学」そして「生き方」だと言うのです。

　食事という営み　買い物する→下ごしらえする→調理する→お料理→食べる→片付けする→　この連続がいわば人生　人とかかわるー働くー料理するー食べさせー伝え（教育）―家族を育てー命をつなぐ　この絶え間ない愛情が籠った循環が「食事」だという考え方だと感じました。「いちばん大切なのは、一生懸命、生活すること。一生懸命したことは、いちばん純粋なことであり、純粋であることは、もっとも美しく、尊いことです。」（土井善晴さんの著書より）

**喜びにあふれる　クリスマスをお祝いする**

2:1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2:2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」2:3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。2:4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。2:5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」2:7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。2:8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。2:9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。**2:10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。**2:11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。2:12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。　マタイによる福音書2章1－12節

クリスマス。みなさんはどんなことを思いつきますか。クリスマス・ツリー　クリスマス・ケーキ　そして、プレゼント。みなさんはもうサンタさんにクリスマス・プレゼントに何が欲しいか、もうお願いしましたか。小人たちがずーっとみなさんを見ていて、この子は良い子です、とサンタに報告します。そうすると靴下にプレゼントを入れてくれます。もちろん、サンタさんを信じていない子どもには贈り物はありません。楽しみですね。

では、イエスさまは何をもらったのでしょうか。「占星術の学者たちが東の方からベツレヘムに来て、ひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」どれも良く分かりませんが、高価で大切なもののようです。どうやらクリスマスの贈り物、プレゼントには何か仕掛けがあるようです。神さまからの贈り物は心でしっかり見ないと中身が分からないのかも知れません。

ところで、聖書を読むと、クリスマスはわたしたちが喜んで迎えているイメージとは違っているような気がします。。そこには美しいイルミネーションや暖かい暖炉、豊かな食卓、幸福に満たされた家族は描かれていないのです。ましてやところせましと並べられた高価なプレゼントなどありません。長い旅をしなければいけないので、泊まるところも満足にないヨセフとマリア。集まってくるのは、暗くて寒い場所でひとりぼっちに震えながら、羊の世話をしていた人たち。イエスの誕生は、ほんの僅かな人々の中でひっそりと静かに神の贈り物としてわたしたちに渡されたのです。しかも生まれたばかりの赤ちゃんだったのです。人々が願って止まなかった救い主はヒーローではなかったのです。

クリスマスというとプレゼントをもらうことばかり考えますが、実は誰かのために与えることが大切なのです。聖書に出てくる占星術の学者たちは長く厳しい旅を導いてきた星を見て、喜びにあふれた、と記されています。決して、その幼子を見て喜びにあふれたのではありません。ことによると、無力に横たわる赤ちゃんを見て失望したのかも知れません。しかし、重要な出来事がここには隠されているのです。　学者たちは 「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った、というのです。この短いことばに、「もらう」だけではなくて、「与える」ことの大切さを気がついた学者たちの感じる力が表されているのです。

　わたしたちが生きる社会はこれまでになく緊張を強いられる状況にあることは間違いがありません。その中で、喘ぎ、不信と猜疑に悩まされることに苦痛を感じます。わたしが歩む道を探し求める時、クリスマスの出来事は人の関係性を回復する道を指し示してくれているのではないでしょうか。喜びにあふれるための贈り物を探す旅を始めようではありませんか。

**クリスマスにはお家でもお祈りしてみませんか**

**わたしたちを愛して下さる神さま、ひとりひとりがあなたからいのちの贈り物を受け取っていることを感謝いたします。平和の神さま、この世の暗いところを私たちのささげるページェントやお祝いの会の小さな光で照らすことができますように。あたたかいお部屋で大切な家族と共にあることを心から感謝します。どうかこの幸せをたくさんのひとたちと分かち合うことができますように。このお祈りをイエスさまのお名前を通して、お聞きください。アーメン**